



# CAJLE Newsletter

No. 38 June 2009

カナダ日本語教育振興会  
Canadian Association for Japanese Language Education

P.O. Box 75133  
20 Bloor St. East  
Toronto, Ontario M4W 1A0, Canada  
Email: [Cajle.Kaikei@gmail.com](mailto:Cajle.Kaikei@gmail.com)  
Web: <http://cajle.info>

Editors: Keiko Aoki, Yoko Sugimoto, Shunko Muroya (Chief)

Copyright © CAJLE 2009

| 目次                                                              |    |
|-----------------------------------------------------------------|----|
| <input type="checkbox"/> CAJLE 会長から                             | 2  |
| <input type="checkbox"/> CAJLE2009 年次大会                         | 2  |
| <input type="checkbox"/> 支部会・教師会・研修会情報                          | 3  |
| <input type="checkbox"/> BC 州日本語教育関係会議、セミナー報告                   | 3  |
| <input type="checkbox"/> 南カリフォルニア日本語教師会                         | 5  |
| <input type="checkbox"/> Alberta Japanese Teachers' Association | 6  |
| <input type="checkbox"/> 2008 日本語能力試験報告 キャピラノ大学会場               | 7  |
| <input type="checkbox"/> 第 20 回全カナダ日本語弁論大会報告                    | 8  |
| <input type="checkbox"/> リレー随筆                                  | 9  |
| <input type="checkbox"/> CAJLE 活動報告                             | 12 |
| <input type="checkbox"/> CAJLE の更なる発展に向けて                       | 12 |
| <input type="checkbox"/> CAJLE 2009 年上半期 活動報告                   | 13 |
| <input type="checkbox"/> 特別寄稿随筆                                 | 15 |
| <input type="checkbox"/> ウェブ講座とウェブページコンテスト報告                    | 16 |
| <input type="checkbox"/> 国際交流基金トロント情報                           | 20 |
| <input type="checkbox"/> B.C.州日本語教師夏季セミナー2009                   | 21 |
| <input type="checkbox"/> 編集者巻末言                                 | 21 |
| <input type="checkbox"/> 編集後記                                   | 22 |

## CAJLE 会長のことば

大江 都

青葉の美しい初夏の候となりました。皆さまにはお変わりありませんか。さわやかな季節に反し、日本でも「新型インフルエンザが感染拡大」との報道。カナダでは特に目立った騒動はありませんが、大阪、東京などの大都市では通勤通学もマスク姿、ついにはマスクの供給不足となって薬局に長蛇の列・・・などなど、波紋が大きいようですね。新聞には「マスクの着脱ポイント」といった記事まであり、いかにも日本的なきめ細かい、徹底したやり方に少しおかしくもなってきました。とはいえ、旅行の多いこの季節、楽観していることはできませんね。このインフルエンザの流行が、早く終息するようお願いばかりです。

さて、CAJLE に話を移します。ニュースレター37号でも述べましたが、昨年の秋より、CAJLE におきましては種々の活動が見直され、一新されてまいりました。たとえば皆さまもお気づきのとおり、ホーム・ページ、デザインも新しく、日英バイリンガルのHPとなって生まれ変わりました。この仕事を担当してくださったのは広報部の室屋春光氏。室屋さんのIT知識と経験に依るところ多です。ここで改めて、CAJLE への貢献にお礼申し上げる次第です。室屋さんはまた、ニュースレター本号の記事にあるとおり、オンラインでの「ウェブページ・ウェブサイト作成法通信講座」を主催され、CAJLE 内外の皆さまがたくさん有益なことを学ばれたようです。どうか今後とも、ご指導よろしくお願ひいたします。

CAJLE の改善に関し、もう一点ご報告いたします。HPにも記載がありますが、今年度より会費の種類、額面、支払方法が変更されました。諸物価上昇のため、北米在住の皆さまには会費値上げとなりますが、一方で、できる限り郵送を廃し電子メールで情報配布をすることを前提に、北米以外の会員の皆さまには会費値下げとなりました。またその他、学生会員、組織会員、三年会員などを設け、さらにカナダ国外の皆さまの便宜を図り、クレジットカードでの支払方法も選択できるようになりました。詳細につきHP(<http://cajle.info>)をご一読くだされば幸いです。

最後に、大事な年中行事についてひとこと。大会実行委員代表の有森丈太郎氏による「CAJLE2009のご案内」にありますとおり、今年も国際交流基金トロント日本文化センターにて年次大会を開催いたします。「創立二十周年」を記念した昨年の大会とは主旨を異に、今大会では特に会員の皆さまの参加を重視した新しい試みが企画されています。実行委員の若いパワーによって、素晴らしい大会になることと思います。多数の皆さまがご出席くださり、活発にプログラムに参加くださるよう、お待ちいたします。

では、8月にお目にかかるのを楽しみに、ご健康で、よい夏を過ごされますようお祈り申し上げます。

## 2009 年次大会

## CAJLE 2009 のご案内

大会実行委員代表 有森丈太郎

昨年、CAJLE は創立20周年の節目を迎え、日本語教育の更なる発展へ向けて新たな一歩を踏み出しました。カナダの日本語教育の振興を目指して立ち上げられたCAJLE でしたが、現在では年次大会の研究発表に世界の様々な地域で活躍なさっている方々からの応募が

集まるようになり、多言語、多文化の国カナダにふさわしい会へと成長してまいりました。

本年度の年次大会は、8月15日(土)～16日(日)の2日間、昨年に引き続き、国際交流基金トロント日本文化

センターにて開催いたします。昨年の大会では「変わりゆく日本語と日本語教育の今」のテーマのもと、日々変化していく日本語の現状を見つめ、それを日本語教育の現場にどのように反映させていくのかを巡って活発な議論が行われました。今年の大会では「これからの日本語教育を考える—教師間・教育機関の連携を目指して」をテーマに、日本語教育の将来を見据え、あらゆる教育機関の教師たちが連携して、プログラムの充実と学習効果の向上を目指すことを提案いたします。

教師研修会では2名の講師をお招きし、各2時間のワークショップを行います。深田淳先生(パデュー大学)には、コーパス(大量の言語資料を蓄積したデータ)言語学の観点から、日本語教育へのさまざまな応用方法についてお話しいただく予定です。また、磯山(渡邊)真紀先生(国際交流基金ロサンゼルス日本文化センター)には、今後の日本語教育の発展に必要な、さまざまな連携の実践方法についてお話いただきます。

パネルディスカッションでは、深田先生、磯山(渡邊)先生に加えてCAJLE会員からもパネリストを迎え、日本語教育のこれからについて、実践的な視点から活発な意見交換を行う予定です。

今年の研究発表には、カナダ内外からの応募の中か

ら22本が採用されました。発表テーマは多岐にわたり、日本語学や言語習得における理論的考察および多様な実践報告など、充実した内容となっております。

また、大会2日間にわたり、にほんごサークルによる、CAJLE出版物を含む日本語教育関連の書籍、教材の展示販売会も予定しております。実際に書籍、教材を手にとってご覧いただける機会ですので、是非とも足をお運びください。

大会1日目の夜には市内レストランにて懇親夕食会を予定しております。参加者の皆様とテーブルを囲んでの情報交換、ご歓談をお楽しみください。また、大会終了後の17日にはショーフレックスインターナショナル主催のオプションツアーも各種用意してございます。トロント市内および近郊の名所を存分に楽しんでいただける内容となっております。

このオプションツアーも含め、大会の詳細および宿泊、交通情報などをCAJLEのホームページ(<http://cajle.info>)に掲載しております。Annual Conferenceのページをご参照くださいませ。

皆様のご参加を、大会実行委員一同、心よりお待ちしております。

## 支部会・教師会・研修会情報

この欄ではCAJLEの地域支部会のみでなくカナダ各地に存在する日本語教師会、あるいはカナダ国外でCAJLEと何らかの形で関係のある日本語教師会の活動を紹介していき、教師会間のネットワーク形成を促進する一助としたいと考えています。今号ではBC州での各種の教師会活動、南カリフォルニア日本語教師会、およびアルバータ州日本語教師会の活動の様子を報告してもらいます。(編集部)

### BC州日本語教育関係会議、セミナー報告

レベッカ・チャウ、竹井明美、ウッド弘枝

CAJLE BC州理事は、昨年秋より州内でのCAJLE宣伝開発の動きの一端としてBC州で例年開催されている日本語教育関係会議やセミナーへの認識を深めると同時にCAJLEとの交流交換や宣伝開発を試みてきた。この春、Standing Committee on Language Articulation

(SCOLA)とBC州日本語教育振興会(JALTA)の会議に出席する機会あり、ここに、それらの報告をまとめてみた。又、BC州日本語教師会からのお知らせも添えさせてもらった。

## 1. Standing Committee on Language Articulation (SCOLA)

SCOLA Annual General Meeting は、2009年5月1日に Vancouver Island University, Nanaimo にて開催された。参加者の多くは BC 州内のカレッジと大学で言語教育に携わっている教師達で、会議は例年のごとく午前中は各機関の現状報告、Heritage languages with SCOLA, Articulation of upper level classes, Articulation of new classes, Canadian TCSL (Teaching Chinese as a Second Language) Association 等が討論された。各機関には、それぞれのチャレンジがあるものの、活発な実践報告や情報交換がかわされた。又、2人の教師による下記のプレゼンテーションがあった。

“Keeping the Lab Alive: A Question of Momentum?”

Annette Dominik, Thompson Rivers University

“Demonstration of the Table PC – The Magic Tool in a Language Class, and its Equivalent with MacIntosh (MacBook)” Marie-Andree, French, Douglas College and Ulrike Ebeling, German, Douglas College

午後は、各言語グループに分担されそれぞれの討論となった。今回 SCOLA に参加された日本語教育機関は、University of British Columbia, University of Northern British Columbia, Vancouver Island University, Trinity Western University, and Langara College と少なめであったが、CAJLE BC 州理事は、簡単に CAJLE の紹介と09年大会の案内をさせていただいた。持参した CAJLE パンフレットや年次大会 CAJLE2009 へのご案内も各機関にお渡し、今回欠席だった機関へは VIU の古田貴己先生が高等学校も含めて宣伝して下さることになった。

SCOLA 日本語部門の討論では、各機関から様々な具体的かつ現実的なトピックが集まり(欠席者からはメールで討論のトピックが送られてきており、多数の教師達の熱心さが伺われた)討論が開始された。主な討論内容は、Upper level courses, Textbook survey, Projects for the 2nd and 3rd year courses, Number of kanji introduced

in each course, Japanese language restrictions, Inconsistency of course titles across institutions, Courses integrating the studies of language and culture 等であった。

この会議を通して、常に新しいチャレンジに向かい外国語としての日本語教育をより高度なコースとして教えていく BC 州日本語教師達の熱意を実感した。そして、BC 州には多数の日本語教師が存在するにもかかわらず、CAJLE に関する認識が浅い教師や CAJLE 会員を持続していない教師が多いという事実も目にした。現在の CAJLE の実情をより多くの日本語教師に理解していただきお互いの交流を深くしていく為に、現理事達はこのような機会により多く参加し、州内から国内、国外へと CAJLE の輪が広がっていくように願っている。

## 2. BC 州日本語教育振興会(JALTA)

5月4日と5日の両日、BC 州日本語教育振興会(JALTA)主催の第25回日本語教師研修会が NNHC ナショナル日系ヘリテージ・センターで行われた。BC 州内のヘリテージ・スクールで日本語を教えている先生方が約60名出席し、講師2名による講演とそれに続く熱気ある質疑応答が交わされた。チャウと竹井が参加し、一日目の会の最後に10分、時間をいただいてチャウが CAJLE の今年度の年次大会の案内をさせていただくことができた。

1日目の講演は UBC オカナガン校のオールウィン・スピーズ先生による「ポップカルチャーを通した日本語教育の可能性」だった。先生は日本のポップカルチャーの研究者で、大学院生、学部生にマンガやアニメのテキスト分析、ジェンダー論について教鞭をとると同時に、ポップカルチャーを使った斬新なカリキュラムで日本語プログラムを教えているそうだ。マンガ・アニメ・ゲームを文法や会話、あるいは日本文化の補助教材としてではなく、ポップカルチャーの作品を中心教材として教えている授業の教材やデータを紹介された。

翌日は、地元のベテラン、江川元明先生による「日本

語能力試験の読解問題の解法とテクニック」と題して具体的な生徒の指導法の披露があった。1級から4級までの出題傾向を分析した上で、論説文、随筆文、物語文等の文体別に解法のストラテジーを紹介し、教師自身が読解の基礎知識を深める必要があると述べられた。

今回の研修会に参加して、いわゆる継承語としての日本語教育に携わっている先生方も大学等で外国語としての日本語を教えている教師も、共に似通った教育目標、問題意識をもって教えているのではないかと感じた。それは、日本語学習者が多様化してきて、彼らにとって日本語が継承語か外国語かと単純に二分できなくなっているからかもしれない。これからの日本語教育はこの壁を越えてヘリテージ・スクールや大学の教師が連携していく必要があると思う。JALTAの会長は2006年から中島範昭氏に代わり、この世代交代が新しい風をもたらしている印象を受けた。今後は私達もJALTAとの交流を

頻繁に行い、JALTAからも多くの先生方がCAJLEに参加して実践報告、情報交換をしてくださることを願っている。

### 3. BC州日本語教師会

BC州日本語教師会はBC州の高等学校の先生が中心として活動されていて、今年の8月25日から27日まで国際交流基金トロント事務所の主催で北浦和の国際交流基金日本語国際センター専任講師根津誠氏を招いてBC州日本語教師夏季セミナーが開催される予定である。VIUの古田貴己氏の厚意により、この会にもCAJLEの年次大会の宣伝をさせていただいた。

(編集部より: BC州日本語教師会から夏季セミナーのお知らせがあります。21ページをご覧ください。)

## 南カリフォルニア日本語教師会

リグス秀美

去る4月5日(日曜日)南カリフォルニア地域在住の日本語教育関係者を対象とした春期研修会がアメリカ創価大学にて開催された。この研修会は南加日本語教師会・カナダ日本語教育振興会・アメリカ創価大学の三者協賛によって実現したものである。参加者は約80人。遠くはUniversity of California Santa Barbara校やUniversity of California San Diego校から泊まりがけで来た参加者もあり、日頃日本語教育に携わる者として日本語教育に対する真摯な気持ちが現れていた集いであった。

講演者としてUniversity of Washingtonの筒井通雄教授(基調講演)、Southeast Japanese Language Schoolのモンセン洋子氏、San Dieguito High School Academyの坪井里江氏が招かれた。それぞれ、外国語教授における文法教育が果たす役割の見直し、格助詞の効果的な教え方、高校レベルでの文法教育の実践といったテーマで現場からの報告についての講演があった。

会の進行は、午前9時に開会され、開会の辞の後、今回の研修会がカナダ日本語教育振興会の資金援助とアメリカ創価大学の会場提供という援助によって実現された事を参加者全員に改めて報告し、CAJLEのホームページを見せて活動の概要を案内した。その後、小冊子を配布した。

講演の部として、先ず筒井教授が「外国語教育における文法教育の役割」という演題のもと、教授法における歴史的流れの紹介:生成文法の没落後に起こった文法重視に対する痛烈な批判、それにとって変わった「コミュニケーション・アプローチの信奉」「文法はことさらに教師が教えなくても学習者は自然に身につける」という考え方の誤り、などの段階を経て、現在の文法教育への回帰が紹介された。また、文法教育には(1)大局的な文法(語順、膠着性など)と(2)個々の文法(活用形を含む語のフォーム、語の正確な運用など)がある事、また、学習者のレベルによって学習者の文法獲得プロセスにおけ

る教師が果たす役割の違い、レベル別に現れる語彙の統計的傾向、初級を教える際の問題点、中上級を教える際の問題点についての説明があった。さらに、文法の基礎がしっかりしていない学習者は海外留学を経ても学力があまり伸びないという報告がロシア語の研究者によってなされている事も紹介された。最後に、筒井教授は一般提言として(1)最初が肝心(2)誤りを強化させないためにはエラーを繰り返させない(3)安易に英訳を与えるのではなく「概念」を理解させる事の重要性、の三点を説かれた。最後に、語彙が易しく状況が明確で利用度が高い「いい例文をそのまま覚えさせる」ことが文法教育の現場では有効な手段である事と言われ、講演を締めくくられた。

講演の内容は噛み砕いた理論の紹介から、実行可能なヒントまでをカバーしたもので、役に立った、というのが参加者一般の感想であった。この基調講演の後、一時

間の昼休みを取り、午後は各種お知らせやドアープライズの発表等の後、1時半から講演を再開。モンセン、坪井両氏がそれぞれ90分ずつ発表し、4時30分過ぎに講演終了。閉会の辞の後、研修会は閉会した。会場となった200名収容の大教室のインテリアが格調高いものであったので、「国連で会議を行なっているみたいだった」という喜びの声のアチコチから聞かれたり、CAJLEについて個人的に聞かれたりして大成功の研修会であった。

CAJLEの皆様へ：

資金援助を快諾して頂いたお陰で、大成功といえる研修会を Soka で行なうことができました。初の CAJLE /TJSC 協賛の催し物が成功に終わった事を会員の皆様にご報告出来ることを本当に嬉しく思っております。有り難うございました。

## The Alberta Japanese Teachers' Association (AJTA)

Corbin Musselman

The Alberta Japanese Teachers' Association (AJTA) is represented by a group of approximately twenty Japanese Language teachers throughout the province of Alberta. The primary goal of the association is to promote Japanese Language education in Alberta, and since the formation of our association in 1995, we have seen consistent growth and interest in Japanese across the province.

The executive of the AJTA is represented by Corbin Musselman (President), Scott Coffin (Vice President), Daniel Ito (Vice President), Amy Klatt-Tajiri (Secretary) and Miriam Irons (Treasurer). AJTA members stay connected via the Nihongo-Alberta E-mail Group and the Nihongo-Canada E-mail group plus professional development meetings.

Meetings for all members are typically held four times

throughout the year (Fall, Winter, Spring and Summer) with members meeting face-to-face or via Skype and video conferencing. During these meetings professional development is explored and delivered by AJTA members or by other Japanese language stakeholders. For example, in October of 2007, with the assistance of the Japan Foundation, the AJTA was able to bring Sachiko Renovich (a Japanese teacher from Burnaby, B.C.) to Calgary to present on activities for the Japanese classroom. More recently, AJTA teachers have presented to other members on the use of Smart Board technology as well as Oral Assessment methodologies. In May of 2009 ten of our members attended the CASLT-Languages Without Borders conference in Edmonton, Alberta.

The AJTA is also an active member of the provincial Japanese Language Education Consortium that meets

bi-annually. The purpose of the Consortium is to act as a support to assist networking and promote Japanese language and culture education and programs. This Consortium is made up of various stakeholders who assist with second language initiatives in Alberta. The AJTA recognizes the importance of maintaining a strong provincial association through our direct link to the Alberta Teachers' Association's specialist council – the Second Language and Intercultural Council (SLIC). These affiliations have enabled the AJTA to develop Japanese teaching pedagogies and have also allowed stakeholders to stay connected throughout Alberta.

Contact information for the AJTA is as follows:

Corbin Musselman, Chair  
Spruce Grove Composite High School  
780-962-0800  
cmusselman@psd70.ab.ca

AJTA Email Group  
AJTA@yahoogroups.com  
To sign up, send an email to:  
Daniel.Ito@epsb.ca

Alberta Provincial Email Group  
Nihongo-Alberta@yahoogroups.com  
To sign up, send an email to:  
jhamilton005@gmail.com

## 報告：2008年度日本語能力試験

日本語能力試験はカナダでは三つの会場で実施されています。2008年度の試験では、BC州の会場がUBCからキャピラノ大学に変わりました。ここではキャピラノ大学の水戸和子先生に同会場において実施された日本語能力試験について報告していただきます。(編集部)

### 2008年度日本語能力試験 - キャピラノ大学会場

水戸和子

2008年12月7日日曜日に日本語能力試験が無事キャピラノ大学ノースバンクーバーキャンパスにて実施された。日本語能力試験は国際交流基金が日本語を外国語として学んでいる学習者を対象にした日本語能力を査定する唯一の世界的規模の検定試験である。一年に一度、12月の第一日曜日に世界共通に51カ国159都市で一斉に実施される。カナダでは3つの大学が試験実施校として指定されており、東側ではヨーク大学が1997年より始めており、西側でも日本語学習者の数が増え、ダグラスカレッジ・SFUを経てキャピラノ大学が2008年度より実施校となった。アルバータ大学でも2007年度より実施し始めた。2008年度の実験数を見てみると、ヨーク大学429人、アルバータ大学143人、キャピラノ大学425人と、西側での日本語学習者の数がかなり多い

のが明白。昨年キャピラノ大学が日本語能力試験実施校となる指定が遅れ2週間ほどの遅いスタートとなってしまった為、受験者数が前年度より少なくなりましたが、それでも425人という数はカナダで55%の日本語学習者がBC州に在住しているという統計の反映と思われる。2009年度の実験者数はかなりのびるのではないかと期待している。

日本語は色々な大学で教えられているが、能力試験は1級をパスすると日本の高校卒業レベルの語学力があるとみなされ日本の大学に入学を許可されたり、企業での就職も可能になるというのが大学での日本語学習者にも日本語能力試験を受ける強い動機になっているようだ。また、日系人の受験生の場合にも日本語能力試

験を取っておく利点はある。日本語のレベルがどの程度なのかの証明ができない場合である。日本国籍を持っていると日本語能力試験は取れないのだが、小さい時にカナダに来て日本語は家庭で使っていて日本語がよく話せる子供たちが日本語を使って仕事をしたいと考えても、大学では高いレベルの日本語のコースはなし、普通の既存の日本語コースでは取らせてもらえないというのが実情である状況下では、実際に日本語の能力がどのくらいあるのかという証明が何もなくなってしまうのである。そんな時、日本語能力試験の認定書があればそれを使って、もしかしたら何かしたいことができるかもしれないという可能性もでてくる。そのような子供たちの将来の可能性を広げるためにも、この能力試験は役立つと信じている。キャピラノ大学での実施は初めてのため前年度との比較はできないが、日系人受験者は小さい子供たちも含めかなりいた。

2009年度の日本語能力試験はまだ準備が始まってはいないが、受験するにはルールをちゃんと守ってもらい

たいと痛切に感じた。携帯電話やアラーム付きの時計など音の出る機器は絶対に持ち込まないように願いたい。キャピラノ大学は設備が整っているため時間はスクリーンに映し出せるので時計・携帯等の持ち込みは不要。小さい子供が受験する時は親が特に注意を払ってほしい。

受験申請をできればオンライン化したいのだが、諸々の理由でキャピラノ大学の場合にはまだ無理かもしれない。それで少しでもミスが起きないためにも記入するときには鉛筆を使わずペンでハッキリとブロック体で書いてほしい。特に自分の住所を間違えないようお願いしたい。

日本語能力試験を目指す人は多く、今後ますます日本語能力試験が広まり皆が日本語学習に意欲を燃やし続けてくれることを願っている。次のキャピラノ大学での日本語能力試験に関する情報は8月以降、下記のサイトでチェックしてほしい。

[http://www.capilanou.ca/programs/languages/japanese/Japanese\\_Language\\_Proficiency\\_Test\\_\\_JLPT\\_.html](http://www.capilanou.ca/programs/languages/japanese/Japanese_Language_Proficiency_Test__JLPT_.html)

## 全カナダ日本語弁論大会

### 第20回全カナダ日本語弁論大会 報告

川崎光子(大会実行委員長)

2008-2009年は日加修好80周年を祝う記念すべき年にあたり、数々の記念行事のひとつとして「第20回全カナダ日本語弁論大会」が2009年3月29日、首都オタワで開催と決まりました。

準備委員会としてはこのような規模の大会を計画するにあたり、次のようなことを話し合いました。

1. 準備委員会は熱意と誠意を持って大会の準備に臨み、成功裡に導くこと。但し気負いすぎたり、先走ったりは慎むこと。

2. 絶対に無理はしないこと。無理を通せば必ず何らかの形で思わしくない影響がでてくるのを避けるために

無理はしない。初期の準備段階では大会の運営費助成が例年に比べかなり下回っていた状況をどうするか話し合いの焦点だった。

3. 一番の主役は全カナダ7地区から集まる出場者であること。これに関連してオタワ地区大会出場者の指導にあたる先生方の全面的な協力を呼びかけること。

4. 例年のように事務的な面で全面的に日本大使館広報文化班の補助をお願いしたいこと。

5. 全カナダ日本語弁論大会のオタワ開催を広報し、当日の来場者を募ること。

まず、(1)ですが、日本人のクセで「頑張る」のは当た



り前、日本語教師なら尚更そのような傾向がありそうですが、頑張りすぎないこと、この仕事が増えすぎない程度にすることが大切であると考えればよいのではないかと思います。

(2) 確実な助成額を割り出した結果、「ない袖は振れない」の警え通り、3部門開催は財政的に不可能、2部門のみの結論に達し、遺憾ながら中級部門と上級部門だけで開催に踏み切りました。現在初級レベルの学習者には将来中級部門に出場できる道だけは開けておいたつもりです。各地区代表者にその旨通知しましたが、ご理解いただきましたこと、この紙上を借りてお礼申し上げます。日加修好 80 周年記念行事なのにともう少しく愚痴るところでしたが、結果的には小規模ながら和気藹々とした雰囲気の中で、スピーチの内容がとても面白かったとのコメントも頂きました。

航空券の手配が大変、たいへんと聞いておりましたので、これは旅行社にお願いすることに何の迷いもなく JTB にお任せしました。仕事を背負い込まず、無理をしないことが大切だと思ったからです。ただ各地区の責任者はまさに『時は金なり』を理解して出場者に一刻も早く所定の旅行社に連絡するようご指導願わなければなりません。恒例のレセプションは財政的に無理でしたから、やむを得ずキャンセルしましたが、これは今後予算の許す限り続けたいものです。前夜にでも関係者一同が顔合わせをして二言三言会話がしてあれば、大会当日初対面より気持ちのうえで、楽でしょうから。

(3) 要するに7地区代表の 14 名がどうしたら和やかな雰囲気の中で、日ごろの勉学の成果を十二分に発揮してスピーチを発表できるかが一番重要だと思いました。幸いなことに会場の在カナダ日本国大使館講堂が理想的な広さで、90名の聴衆者も楽しんだようです。舞台上に生け花のディスプレイをしたのも柔らかい気分の演出に役立ったかと感じました。

(4) 事務的な面はいまでもなく、諸々多方面で協力を惜しまなかった大使館の方々、特に文化担当の小玉書記官の助力無しにはこの弁論大会は出来なかったといっても過言ではありません。

(5) 今年で無事に 20 回を終えた全カナダ日本語弁論大会ですが、「そういうものがあるんですか。」と聞かれ、大会関係者と出場者以外には意外と知られていないのが、オタワ地区に限っては現状だと知りました。その意味でオタワ補習校の児童を招き、別室での審査進行中に劇朗読、作文朗読、歌唱をお願いしたのは出場者と児童達双方に大変良い経験になったと信じています。

在カナダ日本国大使館、国際交流基金、カナダ三井物産株式会社、高円宮日本教育・研究センターからは助成金及び賞品などご協力を頂きましたこと、深く感謝しております。5名の審査委員の皆様有難うございました。最後になりましたが、準備委員会及びボランティアの先生方、お世話になりました。

## リレー随筆

### 文脈理解と省略

下條光明

CAJLE の理事会、ジャーナル編集委員会、また年次大会実行委員会、発表企画部と実に多岐にわたる役目で一緒させていただいている有森丈太郎氏より、このリレー随筆引継ぎの依頼を受けた。気がつく、「ご快諾ありがとうございます！」と言われたものの、後悔先に

立たず、である。さて、「リレー」ということなので先の有森氏の「リレー随筆」からとっかかりを探すべく、もう一度読み返してみる。「初老」という言葉の解釈が人によって違う、辞書の定義に納得できないこともある。「辞書に載っている本来の意味と、実際の用法のズレ、というものに

は日本語教師としては敏感でなければいけないだろう」とのご指摘もある。氏が指摘する「実際の用法」という観点は実に興味深く、言語学のみじめな研究にとどまらず、学習者にとっても日本語の面白さが味わえるところだと思ふ。そこでこのテーマで思いつくところを少し綴ってみたいと思う。

まず、「用法」ということでは、文法的に正しくても母語話者は実際にそうは言わない、ということがある。もちろんこれは日本語に限ったことではないが、このテーマは過去の年次大会の教師研修会でも比較的記憶に新しい。2004年の大会で、「コミュニケーションのための日本語教育文法と練習のあり方」と題し、佐賀大学のフォード丹羽順子先生が日本語教科書に見られる問題表現について指摘されていた。その例として「～てください」の否定形の使い方があった。依頼文を導入したからには否定形も、という教科書の意図はわかるが、「ここでタバコを吸わないでください」などのたぐいが口頭練習に出現する、というものだ。日本に行った留学生がそれをそのままを街で言ってしまったらどうなるか、というのは想像するに難しくない(しかも外国語なまりで言われると相当ムカつくかもしれない)。コミュニケーションのための日本語教育という目線では多に問題がありそうだ。つまり、このような問題は日本語が「文脈重視」と言われていることと無関係ではなさそうである。近年すっかり定着したKY(空気読めない・読めてない)という言葉の「空気」もある意味「文脈」であり、文脈が読めないと日本語も大問題、という解釈も可能かと思う。

もちろん、どの言語であれ文脈を抜きにしては語れないが、英語などと文レベルの比較をすると日本語の「文脈重視」的性質がわかりやすい。代表的なところでは、特に話し言葉における主語や目的語の省略、また「が」や「を」などの助詞もよく省略される。さらに、日本語の「はしょった」言い方でよく知られたものでは、「僕はうなぎだ」とか「こんにゃくは太らない」などという、つまり文字通り英訳しても意味が通じない文がある。母語話者であればすぐにこれらの文の意味するところの察しがつくであろうが(食べ物の注文とか、ダイエットの話とか)、学

習者にとっては適切な文脈理解なしには奇妙な文となってしまう。ただ興味深いことに、限られた範囲ではあるが、英語でも似たような表現が可能で、例えば、(駐車場で自分の車がどこにあるか指しながら)“I’m the blue Toyota”「私はあの青のトヨタ」、とか(レストランで料理を持ってきたウェイターに)“I’m the Ham Sandwich. She is the Chicken Caesar Salad”「私はハムサンド。彼女はチキンシーザーサラダ」、など、いかにも「うなぎ文」風で、適切な文脈なしではすわりが悪い。

ところで、英語との比較ということでは下のような名詞修飾節などもおもしろい。

「頭がよくなる本」

「かにかが好きなレストラン」(そのレストランのかにかが好き、という意味)

これらの表現は、少し頭をひねらないと意味の通じる英訳が出てこないことからわかるように、「(読むと)頭がよくなる本」や「(誰かが)かにかが好きなレストラン」など、(文脈も含めて)世の中の常識に基づいた推測なしには意図されたところの理解は難しい。(しかし、「スポンジ・ポップ」通の方には「カニが(行きつけの)好きなレストラン」という解釈もごく自然であろうと思う。一応念のため。)

例に漏れず、私の大学の中・上級レベルの日本語でも日本のドラマや映画も使っているが、スクリプトの精読となるとかなり難しい(なのであまりやらない)。各単語の意味を積み上げながら文全体の意味をとらえる、いわゆるボトムアップ処理では、理解が困難な文が多いからだ。文脈の理解、および文脈からの予測が不可欠で、文や単語を見ているだけでは手ごわいケースが多々ある。これはほんの一例だが、「愛していると言ってくれ」というドラマ(第1話)の中で常盤貴子が演じるヒロイン・水野紘子が言う台詞。

「健ちゃんしか東京に来れる人いなかったんだもん。」

これを文脈なしで意図された意味がわかればすごい。ストーリーを知らなければこの文は「健ちゃんだけが東

京に来ることができた」と解釈されてしまうだろうが、実は間違いで、正しくは、これを言った絃子が「東京での唯一のつて、健一を頼って東京に来ることができた」ということである。つまり、「健ちゃんしか(私が)東京に来れる(ために頼れる)人いなかったんだもん」のように、カッコの部分が抜けてしまっており、その抜けている部分を文脈から酌まなければならない。

ついでに、このすぐ前の健一の台詞であるが、こうなっている。

健一：「おい、今度は役取れよ。俺おまえ、責任あるんだからさ。この劇団紹介したのも、俺だしさ。」

絃子：「健ちゃんしか東京に来れる人いなかったんだもん。」

このドラマをご存知の方にはおわかりだと思うが、この場面では、絃子が女優を目指して上京したものの、稽古に身が入らず幼なじみの健一をやきもきさせているところである。ここでご覧いただきたいのは「俺おまえ、責任あるんだからさ」という文であるが、「俺おまえ」というのが無助詞化していて誰が誰に対して責任があるのかというのが実にややこしい。健一は「俺」と「おまえ」を一呼吸で言っており、言い間違いを修復したわけでもない。文脈から察すると「俺(が)おまえ(に対して)、責任(が)あるんだからさ」となるだろうが、やはりこれも話の流れが理解できていないと難しい。

最後に、少し違ったタイプの省略構文を1つ。主語や目的語などの省略は周知の通りであるが、動詞も省略可能である。この数量詞構文では動詞の代わりに「です」が代用される点で実に興味深い。下はインターネットブログからの例である。

「みんな今週は何回マクドナルドに行きましたか？  
ボクは今のところ5回です。ビッグマックを  
5個です。」

ここで問題なのは最後の「ビッグマックを5個です」という文である。これは「ビッグマック5個です」という、いわゆる

「AはBだ」という名詞文ではなく、ビッグマックに目的格の「を」が使われている。したがって本来は「です」ではなく、「食べる」などの動詞がなくてはならないところが省略されている。つまり、この文では(マクドナルドに行く、という先行文脈をうけて)ビッグマックを5個食べた、ということを書きたいのであろうが、読み手はその省略された動詞を文脈から酌まなければならない。

以上、日本語の「実際の用法」から始め、省略を中心に少しだけ用法を拾ったが、ご覧の通り日本語の実際の用法は実に面白い。文脈重視を日本語教育に絡めれば、「文脈化」というキーワードがあげられるが、CAJLEでお馴染みの早稲田大学・川口義一先生は「『許可求め/与え表現』の文脈化」の中で「目標言語の語彙や文法事項の指導にあたって、その語彙や文法事項が使用される実際の文脈を、どれだけ自然な、かつ学習に容易な形で提示できるか」の課題を指摘されている。さて、紙面の都合上、かなり強引なまとめとなってしまったが、海外で外国語として日本語を教えるにあたって、教える日本語そのものを外国語化させてしまわない(つまり奇妙な日本語を教えない)ためにも、教材選びや教室活動など多岐にわたって「実際の用法」を意識したいと考えている。

さて、今回の執筆者だが、嬉しいことにヴァッサー大学の安部さやかさんの快諾をいただいた。安部さんはCAJLEでは比較的新顔だが、数年前にバッファロー大学言語学科でPh.D.を取得され、私も彼女の素性を把握している(と思う)ので自信をもってバトンをお渡ししたい。博士論文では日本語の「～てしまう」構文について興味深い議論を展開されたが、最近では日本語教育にも熱が入り、今回のリレー随筆が今から楽しみである。

#### 執筆者のプロフィール

大阪府出身。英語教員を目指し1988年に渡米留学したが当初の志を遂げず未だ在米。バッファロー大学Ph.D.(言語学)。アラバマ大学助教授を経て、現在バッファロー大学言語学科准教授。

## CAJLE 活動報告

## CAJLE の更なる発展に向けて

西島美智子(CAJLE 開発企画)

昨年は、CAJLE(カナダ日本語教育振興会)が誕生して二十周年の年に当たり、記念すべき年次大会が行われました。これまで、カナダをはじめ、アメリカ、日本、そしてその他の国々に会員を増やしなが、CAJLE はさまざまな活動を続けることができ、日本語教育の発展、そして日本語教育に携わっている方々のネットワーク作りにも貢献してきました。これまでの二十年の歩みを考えると、その間に起ったさまざまな社会変化や日本語教育事情の変化などが見えてくるようです。

そして、この二十周年大会は、CAJLE がこれから何をすべき時にあるか、どのような方針を打ち出して更なる発展を推進して行けばよいか、などを考える機会となりました。そこで、CAJLE の存在をより広くアピールし、日本語教育に携わっている方々へのサポートを提供すると同時に、その活動のための資金が得られるよう、開発を進めて行く必要があるということから、CAJLE「開発企画」という部門が発足しました。この担当には、小室リー郁子氏、伊東義員氏、そして私、西島美智子の3理事が当たることになり、話し合いが進められました。

その結果、「開発企画」が行っていく活動の柱として、以下のことを打ち出すことになりました。

## (1) 広報活動

- CAJLE を紹介する小冊子(日英)を作成し、諸機関に送付したり、ウェブサイトに掲載したりする。これにより、会員を増やしたり、CAJLE が行っている活動への参加者を増やす。
- 活動報告や催しのお知らせを流すためのメーリングリストを作成する。これには、公的機関、日本語教育団体、日本語コースがある教育機関などを含める。
- 初めの目標として、カナダ国内に焦点を当てた広報活動を行うが、適宜、国外の広報活動も加える。

## (2) 研修会/ワークショップの推進及び支援

- さまざまなレベルで日本語を教えている人たちを対象に、1日もしくは半日の研修会/ワークショップを企画する。
- どのような内容の研修会/ワークショップが望まれているか、調査を行うことで、ニーズにあったものを提供したい。
- 参加者が多く集まると思われる地域として、トロント、バンクーバー、アルバータ州を候補に挙げ、催しを行う可能性を検討する。
- 各地の日本語教師会が行う、日本語教師のための研修活動を支援する。また、CAJLE の年間費用として承認された、研修活動費用の用途のための審査及び決定を行う。原則として、カナダ国内で行われる活動(研修会、講演会、ワークショップなど)を対象とするが、支援の意義があると認められた場合は、カナダ国外の活動にも適用する。

## (3) 活動資金の確保

- 様々な活動を行っていくためには、その活動資金を確保しなければならない。その実践として、カナダ国内にある日系企業を中心に、スポンサー協力のお願いを積極的に働きかける。
- いくつかのオプションを設定し、具体的な支援内容を提示して協力を仰ぐ。また、支援協力に対しては、CAJLE の広報を通じてその協力を提示する。

以上のような方針をもとに、この半年間、さまざまなことを実践し、すでにその成果が現れてきました。

まず、(1)の広報活動については、すでに、小冊子を作成し、広報の機会があるごとに配布しています。また、どなたでもダウンロードしてコピーしていただけるよう、PDF ファイルをウェブサイトに掲載しました。メーリングリ

ストは、現在、その作成を進めており、8月に行われる年次大会の案内とともに、発信/発送できるよう、準備をしています。

(2)については、実践までにいろいろな働きかけや話し合いが必要ですが、カナダ国内において研修活動を行う地域がさらに検討されました。その結果、BC州在住の理事3名、弘枝・ウッド氏、竹井明美氏、レベッカ・チャウ氏による、積極的に前向きな企画への提案が出され、BC州での研修会/ワークショップ開催の実現に向けて、働きかけが始まりました。また、トロントにおいては、小室リー氏を中心になって、検討を続けています。実践的なセミナー/ワークショップの開催を計画し、そこでの意見交換をもとに、今後の活動を具体化していくことが目下の目標です。オンタリオ州では、初等中等教育と高等教育のパイプの弱さが長年の懸案事項でもあるため、地域の、横と縦のネットワーク作りを支援することが大切でしょう。

さらに、日本語教師会が開催する研修会活動への支援も行うことができました。昨年、CAJLE年次大会に参加された、アメリカ創価大学のリグス秀美先生を通して、南カリフォルニア日本語教師会(TJSC)が行う、2009年春期研修会に、CAJLEが協賛団体として参加しました。カナダ国外ではありますが、リグス先生はCAJLE会員でもあり、このような支援を通してCAJLEが日本語教師の活動に協力し、TJSCとのつながりができることは、大変有意義なことです。そこで、研修会講師招聘費用の一部として、CD\$500を負担することが決まりました。研修会開催に当たっては、TJSC会員、また研修会参加者にCAJLEの紹介を行ってくださり、今後のネットワーク作りにつなげていただくことができました。

そして、(3)の活動資金の確保ですが、「開発企画」の担当であり、トロント日本商工会の専務理事でもある伊東義員氏を中心に、具体的なスポンサー協力依頼の計画を進めることができました。昨年は世界中で経済下降が起っていた時期だけに、日系企業へのアプローチも難しく、どれだけご協力いただけるか、不安な活動開始ではありましたが、おかげさまで、三社からご支援をいただくことができました。(2009年5月現在)

#### ゴールド会員

- JAMES MOTO ENTERPRISES/SHOW FLEX INTERNATIONAL INC.
- DAVIS LLP(原道子弁護士)

#### シルバー会員

- YAMAHA CANADA MUSIC LTD.

スポンサーとしてCAJLEの活動へのご支援をいただいた上記三社に、心からお礼申し上げます。この資金を有効に活用させていただくためにも、CAJLEはこれからますます、日本語教育に貢献できるような活動を行っていくよう、努める所存です。なお、スポンサー協力に関する情報は、CAJLEホームページ(www.cajle.info)をご覧ください。

以上が、昨年秋に発足した「開発企画」の紹介と、これまでに行ってきた活動内容およびその成果です。これからも、CAJLEの更なる発展のために、さまざまな働きかけに力を入れていきたいと考えています。みなさまからも、提案や助言などいただけましたら、大変嬉しいです。今後とも、「開発企画」へのご支援、ご協力のほど、なにとぞ宜しく願い申し上げます。

## CAJLE 2009年上半期 活動報告

畔上ラム智子、ウッド弘枝、ハウ博美

### 1) ジャーナル CAJLE

ジャーナル CAJLE10号は、5月時点で旧編集委員から「12月発行を目指す」ことが提示され、理事会におい

ても承認を受けていたが、新編集委員会が再度現状を検討したところ、12月発行は非常に難しいと判断し、通常のスケジュールに戻し、来年の7月を目指すべき、という意見に一致し、9月20日に理事会の承認を得た。

(下條光明)

2) 2009 年度年次大会準備経過報告

本ニュースレターの「CAJLE 2009のご案内」(2頁)をご参照下さい。

3) 理事会承認事項

2009年1月2日

7月オーストラリア、シドニーで開催予定の「日本語教育国際研究大会 ICJLE2009」に CAJLE が招待され、大会行事の1) 代表者パネルディスカッション(1名)、2) グローバルネットワーク代表者会議(1名)、3) CAJLE 推薦パネルディスカッション(グループ)への参加につき大江会長より提案された以下6項目が理事(9名)より承認された。

1. CAJLE から大会の1)代表者パネルディスカッション(1名)、2)グローバルネットワーク代表者会議(1名)への参加者を送る。
2. 1)と2)については、理事から自薦、他薦する。CAJLE 以外の一般会員でもよい。
3. 1)代表者パネルディスカッション、及び2)グローバルネットワーク代表者会議への参加者は、同一者とする。
4. 3)のパネルは、「発表企画」が一般会員から参加希望を募集し、選定する。
5. CAJLE が1)と2)の参加者に対し航空費の一部 \$500 - \$1,000 を補助する。
6. 3)の参加者については、すべて自費で参加してもらおう。

代表者パネル出席者の決定は1月31日まで。

2009年2月17日

ICJLE2009 への参加につき、自薦、他薦がなく、大江会長が代表者パネルディスカッションとグローバルネットワーク代表者会議に出席する旨を表示し、理事が承認した。大会参加への、CAJLE からの補助金は\$1,000となり、今年度から適応する。

2009年2月23日

CAJLE 大会実行委員会の有森氏より、2009 年度年次大会日程と内容が発表された。

日時:8月15,16日

場所:トロント 国際交流基金日本文化センター

1日目 8月15日(土)

- 8:30-9:00 受付
- 9:00-9:15 開会式、会長、来賓挨拶
- 9:30-12:45 研究発表
- 12:45-2:00 昼食、書籍販売
- 2:00-4:00 教師研修会(1) 深田淳先生「コー

パスを使った言語研究から日本語教育での利用に向けて、

- 4:15-5:15 年次総会
- 6:30- 懇親夕食会

2日目 8月16日(日)

- 10:00-12:00 パネルディスカッション
- 12:00-1:30 昼食、書籍販売
- 1:30-4:15 研究発表
- 4:30-6:30 教師研修会(2) 磯山(渡邊)真紀先生(タイトル未定)
- 6:30-6:45 閉会式

2009年3月4日

「開発企画担当」の伊東氏よりスポンサー依頼活動について報告があった。日系企業を対象としたスポンサーには、プラチナ 1,000 ドル、ゴールド 500 ドル、シルバー 200 ドルとして、依頼し、現在(3月) JAMES MOTO ENTERPRISES(SHOWFLEX) 松本社長よりゴールド 500 ドル、DAVIS LLP 原弁護士よりゴールド 500 ドル、YAMAHA CANADA MUSIC よりシルバー 200 ドルのスポンサー協力を得た。

2009年3月27日

大江会長より、昨年の理事改選依頼欠員となっていた副会長を理事の西島氏に依頼し、西島氏より承諾を得たことを発表された。3月30日に理事により承認され、当面必要な際に、会長代理となり、次期会長候補の副

会長が選出された場合、補佐となることを西島氏より承諾された。

2009年5月20日

CAJLE年会費の改正:2009年6月より(会計:高崎麻由)

(1) 年会費(一般)

カナダ会員 \$45 CA その他会員 \$45 US

(2) 3年会費(一般)

カナダ会員 \$120 CA 3年

その他会員 \$120 US 3年

(3) 組織会費

カナダ会員 \$120 CA(各組織4名まで)

その他会員 \$120 US(各組織4名まで)

(4) 学生会員

カナダ会員 \$30 CA

その他会員 \$30 US

これらの会員には、特典が付き、更にクレジットカードによつての支払いが可能になった。

以上が5月20日に理事会より承認された。

#### 4)部会活動報告

BC 地区とトロント地区が今後のワークショップおよび情報交換会の方針と具体的な計画を薦めている。

#### BC 地区での経過報告

ウッド氏に取りまとめ役となり、BC 州内の教育機関で

の活動を調査した。

・2008 年秋以降:BC 州内で継続されている主なコンファレンスやセミナーの情報収集

・2009 年1月:収集した情報をもとに、CAJLE でできることを検討。具体的には、州内の大学やカレッジへの広報活動、ワークショップやセミナーの企画、日本語学校・高校・大学・カレッジ間の情報交換の推進など。

#### トロント地区での経過報告

小室リー氏に取りまとめ役となり、国際交流基金(以下、JF)との話し合いを進めた。

・2008 年秋以降:トロント地区で高校やヘリテージの学校などで教えておられる先生方にインフォーマルに相談、および先生方からの情報収集

・2009 年2月:以前から高校や日本語学校の先生方をターゲットとした企画を考えておられる JF に相談。双方が協力して企画を進められないか打診。

どちらの地区においても、2009 年度中には今後の方針と具体的な計画を立て、何らかの形で活動をスタートさせたい(小室リー)。

#### 5)年次大会案内

本ニュースレターの「CAJLE 2009 のご案内」(2 頁)をご参照下さい。

## 特別寄稿随筆

### 声の今とむかし

楊 曉捷(カルガリー大学)

大学での講義は四月に終わり、例年と同じように九月までは研究に専念する時間だ。今年は、一年以上前から約束していた一篇の雑誌論文をまず書き上げること。そのテーマは、日本中世の声である。

わたしの研究対象は、絵巻という、きわめて日本的な要素の強い中世の古典だ。典型的な絵巻は、詞書と絵

とが交互に書き入れられる。このような作品を理解するために、声という視点を持ち込むというアプローチのきっかけは、しかしながら、いたって現代的なものだ。それは、マルチメディア。これまで文学と言えば、言葉の通りの、文によって成された学問であって、文字によって記録された資料に限定してきた。文字記録は当然一つのメデ

メディアであるが、それが一つのみで、比較する対象を視野に取り入れないがために、メディアという目で眺めることが少なかった。それに対して、絵巻は絵と文字という異なる記録方式によって成り立つ。ビジュアルとテキストと、メディアの競演だと捉えれば、そこに自然に音声という要素が浮かびあがってくる。りっぱなマルチメディアだ。

このように、メディアという角度から物ごとを眺めてみれば、さまざまなことに気づくようになる。話はだいぶ飛ぶが、たとえばわたしたちが仕事にしている日本語教育について考えてみよう。日本語学習者を育てるには、声、声を発する、しゃべってもらうことは、言語能力を図る上で何よりも大事な指標だ。発音、イントネーションなどは、学習者の成績判定が難しい。筆記試験となればいい成績が取れても、会話となるとまったく満足に交流できないという学生の苦勞を、われわれは数え切れないほど知っている。また、反対のこともある。話すことをもって言語能力のすべてだと考えるあまり、会話能力のみをもって勉強の結果を判断しようとする。かつてかなり広く使われていた教科書があって、その全編にわたってすべてローマ字表記にしたものだった。仮名や漢字の読み書きなどは一切不要で、会話だけに専念してよいとの意図がありありだった。一つのメディアへの極端な傾斜だったと言える。

ところで、日本の古典を考える上で、メディアについての観察からどのような手がかりが得られるのだろうか。まず、明らかなことだが、録音機といった便利な道具は現代の特権であり、これに恵まれなかった中世の声そのものは、たとえば古典芸能や古来の祭りの伝承を信じる以

外、そのあり方を伺うことなどもう不可能なことだ。しかしその反面、中世の声が聞けなくても、それをめぐるさまざまな情報が文字や絵などの形で伝わり、そこから声の様子をさぐることができる。一つの資料群を挙げてみるとなれば、中世の文化人が記した日記がある。これは膨大な分量に上るもので、いまやその多くがデジタル化されて、オンラインで検索することまで可能だ。その中から、いろいろな声が聞こえてくる。たとえばつぎのような記録がある。ある文化人が旺盛な勉強意欲を満足させるために、忙しい日常の中で、食事などの間に仕える人に書籍を読み上げてもらった。まさに人間録音機よろしくといった、ほほえましい風景ではなからうか。それから、日本古典の核心を成す物語は、まさに「物を語る」行為から出来上がり、口から耳へという伝達を基本としたものだった。したがって、一部の学者によれば、声を出さないで本を読むという黙読は、近現代ならではの行動であり、古代、中世の人々には、声を出しての音読以外、読書する術をまったく身に付けていなかったと、いささか極端な意見まであった。

高々と読み上げられ、語られる声を伴う絵巻の鑑賞は、したがって声があるゆえの場、時間、ないし読者たちの精神のありかたを現代のわれわれに伝えている。声のある、いや、エネルギーに漲った声が充満する日本中世の時空への旅は、知の刺激が詰まっっていて、まさに興味が尽きない。

(「絵巻三昧」：<http://emaki-japan.blogspot.com/>)

## 報告： ウェブサイト作成通信講座と日本語ウェブページコンテスト

室屋春光

国際交流基金派遣の日本語教育アドバイザーとしての私の業務をひとことで言いあらわすとすれば、カナダにおける日本語教育の支援ということになります。その仕事の一環として07年、08年、09年と三年続けて日本

語教師を対象とする「ウェブページウェブサイト作成法通信講座」というオンライン通信教育講座と小中高の日本語プログラムを対象とする「日本語ウェブページコンテスト」を実施しました。この場をかりてこの講座とコンテ



ストについて簡単に CAJLE 会員の皆さんにご紹介したいと思います。

#### ウェブ講座について

この講座とコンテストの雛形となったのは 05 年にオーストラリアのビクトリア州で実施した「ウェブページウェブサイト作成法研修会」と「日本語ウェブページコンテスト」です。その当時、私はビクトリア州教育省の日本語アドバイザーとして州内の K-12 レベルの日本語教育の支援をしており、小中高の日本語プログラムが自らのウェブサイトを持つことができればいろいろな形で活用できるだろうと考えたのがきっかけでした。そのために、まずウェブページとウェブサイトの作成法を先生方に学んでいただくための研修会を州内各地で実施し、さらに日本語ウェブページコンテストを開催して実際に生徒とともにウェブサイトを作る機会を提供するという方法をとりました。

日本語教師が自らのウェブサイトを運営することができればどのようなことができるか、いくつか具体的な例をあげてみましょう。まず、宿題、課題、自宅での学習などに利用することが考えられます。これまでの紙やノートを使った宿題だけでなく、インターネットを利用した課題やプロジェクトなども簡単に課すことができます。また、宿題や教室で使うハンドアウトを学生にウェブサイトからダウンロードするように指示することで、教室で配布するためのコピーをする手間やコストが省けます。音声ファイルや画像ファイルもサイトにアップロードできるので、以前のように学習者のためにカセットテープを何本もコピーするというような手間も省けます。掲示板のようなページを設けることにより学習者への各種連絡も容易になります。さらには、自身のプログラムの内容や学生の学習状況、特別イベントなどの情報をサイトで公開することによって、対外的にプログラムの振興・広報活動をおこなうこともできます。また、学習者に学習した内容を生かしたウェブページを作成させウェブ上に公開することにより、学習成果を学習者間で共有したり体外的に披露することもできます。

このように第二言語教育プログラムにとってウェブサイ

トの利用にはいろいろなメリットがあり、今後もその利用価値はより大きくなりこそすれ減少することは考えられないでしょう。そのような見地にかんがみ、06年にカナダのアルバータ州に日本語教育アドバイザーとして着任してからも、私はウェブ関係の研修を業務の一環として推進してきました。この3年間、毎年実施したウェブサイト作成通信講座と日本語ウェブページコンテストはその柱となるものです。

内輪の話になりますが、私自身はカナダに派遣された日本語アドバイザーであることから、06年後半に講座とコンテストの準備に取り掛かったときは対象をカナダ国内に限ることを考えました。しかし、みなさんご承知のように、日本語学習者数、日本語教師数、日本語教育機関数といったような統計的な数字の面では、カナダは例えば言語教育の超大国であるオーストラリアなどと比べると少数派であることは否めません。講座にしてもコンテストにしてもカナダのみに対象を絞ってしまうととても規模の小さいものになり、特にコンテストはコンテストとしての体をなさないのではないかという不安がありました。また、国境のないことがインターネットの最大の利点であることも考え、思い切って講座の参加者もコンテストの参加校も対象地域を一切制限しないことにし、世界中のどこからでも参加できるようにしました。また08年と09年の講座では、受講者の選択で日本語と英語のどちらでも受講できるようにしました。

講座の期間は5週間(5セッション)。参加者は毎週送られてくる教材(電子メールに添付)にしたがって実際にウェブページを作成し自身のサイトのサーバーにアップロード、さらにそのサイトの URL をその週に課せられた課題として講師に電子メールで提出、講師はその URL のページを閲覧し参加者の進捗状況をチェックするという形式です。講座の説明と教材をご覧になりたいかたは、以下の URL のページに行き、「Web Instructions (教材)」あるいは「Correspondence Course (講座説明)」をクリックしてください。

[www.japanesewebpagecontest.com](http://www.japanesewebpagecontest.com)

また、講座修了時のウェブサイトのサンプルは以下の URL でご覧になれます。サンプルウェブサイト

<http://abcdhighschool.tripod.com/>

過去3回の講座で参加者数は増え続け、今年の春の講座では講座参加申込者数は世界30カ国から380名を数えました。以下はその国別内訳です。

オーストラリア 119、アメリカ 78、英国 41、日本 38、カナダ 31、ニュージーランド 17、ドイツ 9、イタリア 8、インドネシア 6、フランス 4、ハンガリー 3、スイス 3、カンボジア 2、中国 2、イラン 2、アイルランド 2、不明 2、オーストリア 1、ベルギー 1、ブルガリア 1、デンマーク 1、アイスランド 1、韓国 1、キルギス 1、ポーランド 1、ロシア 1、シンガポール 1、スペイン 1、スウェーデン 1、トルコ 1

講座申込者の機関別内訳は大学の日本語教師が約200名と一番多く、小中高校の日本語教師は約130名でした。また、最後の第5週まで全ての課程を修了した講座参加者の数は約150名で、講座申込者全体の半分よりもやや少ない数となっていますが、この種類の通信教育でしかも無料で提供されたものとしてはとても高い修了率であるといえるようです。

以下に実際に講座に参加した3名の先生方に講座に参加した感想を書いていたいただきましたのでご紹介します。

木村美香先生(ピクトリア大学、カナダ)

大学でもクラス運営のためのWebCTやMoodleなどの使用が進み、学生の勉強のスタイルの変化を感じる中、日本語のコースではどのようにコンピューターを活用したらいいか模索していました。そんな時、室屋先生からウェブサイトを作成するオンラインコースのお話を聞き、迷わず2008年度と2009年度の両方のウェブサイト作成のコースに参加させていただきました。

ウェブサイトの作成は難しいと思っていた私ですが、このコースでは、作成の仕方を初歩の初歩から、そして私のようにあまりコンピューターが得意でない者でも理解できるようにステップ・バイ・ステップでとても分かりやすく教えていただきました。またどうしても分からない場合には

先生とメールを通して一対一で教えていただくこともでき、本当に助かりました。毎週先生から送られてくるタスクはそれを実行することで今まで使ったことがなかったプログラムの操作を発見できたり、自分が作成しているサイトが少しずつ完成していくのを実感できたりと、大学の学期の途中で忙しい時でもありましたが、とても楽しく勉強することができました。今年のコースでは、宿題や写真などのアップロードやリンクの仕方を習っただけでなく、YouTubeなどの動画の埋め込み方も教えていただき、ますます日本語学習へのウェブサイト活用の可能性が広がりそうです。

コースの受講は終了しましたが、これから自分がこのコースで習ったことを日本語コースにどのように役立たせることができるか出発点に立ったような気持ちで、ワクワクしています。このような機会をいただいたことに本当に感謝しています。

上坂美和子先生(McGill 大学、カナダ)

ウェブページを作ることに以前から興味があったので、講習会の案内が送られてきた時、時間的なこと、コンピューターに詳しくないことなど不安材料はありましたが、思い切って受講してみることにしました。

一週目の教材をプリントアウトしてみるとかなりの分量があり、これは無理かな、と思ったのですが、やりだしてみると、説明が懇切丁寧かつ明解で、またコンピューターに詳しくない受講者用はかなり初歩の部分から説明してあるので、まごつくことなく一步一步進んでいくことが出来ました。もう一つよかったのは、教材に従って手順を進めていけば、それでその週のタスクが終わるようになっていて、忙しい時期でもくじけることなく最後まで終わることが出来ました。YouTubeへのリンクのつけ方なども学び、最終的に出来上がった自分のサイトを見て、コンピューター音痴の私でもここまで出来たと我々が

ら感動し、またそれを可能にしてくれた講習に感謝しました。

この講習では、ウェブページの作り方を学びながら、コンピューター使用に関する一般的な知識も増やすことが出来ました。そして、コンピューターに対して感じている、もやもやとした不安が少し解消されたのも大きな収穫でした。室屋さん、本当にありがとうございました。

鈴木美穂先生(目白大学、West Vancouver Secondary School 交換教員)

昨今の高校生のPCを使いこなす能力には目を見張るものがある。パワーポイントでの発表、インターネットからの情報収集など、何の苦労もなく楽しそうに行っている。この生徒の能力を授業にもっと活かすために、以下の3点を入れるWebページを作りたいと考えた。

- 1) 授業を欠席した生徒が授業の内容を確認できる。
- 2) 宿題などのワークシートをダウンロードできる。
- 3) 授業で扱えなかった資料や情報を捕捉する。

ところが、以前の作成方法はもう古くなって使えない。Webページを作りたいが、どこから手をつけていいかわからない、そんな時に、WEBページ作成法通信講座開講のメールをいただいた。この講座は私が当初の目標とした上記1)~3)を全て網羅した講座だった。そして膨大な情報の整理と選別、言語習得に欠かせない音声や映像のアップロードの方法も学ぶことができた。また、提出した課題を丁寧にチェックしていただき、的確なアドバイスをくださったので、自分の作業ミスをしっかり把握することもできた。講座の教材は、いつでもすぐに手にとって確認できるように、プリントアウトして手元に置いてある。

どのようなWEBページを作れば「見てもらえる」のか、効果的なWEBページを工夫して作って

いくことがこれからの課題である。

日本語ウェブページコンテストについて

日本語ウェブページコンテストのほうは、3月にコンテストの要項の発表、4月末に参加申し込みの締め切り、5月末に参加作品のサーバーへの最終アップロードと審査、6月1日にコンテストギャラリーの公開、6月5日に審査結果の発表、という日程で実施しました。

このコンテストの主な目的は、日本語を第二外国語として学習している初等中等学校の生徒や継承語系日本語学校の学習者が普段の学習の成果をウェブページの形で披露する場を提供することと、日本語教師の皆さんにウェブсайт作成を中心とするITスキルを習得していただくことにあります。

コンテストには高校3年、2年、1年、中学校、小学校、そのほかの日本語学校(初・中級レベル)の7部門があり、各部門にはそれぞれトピックが設定されています。コンテストへの参加は、部門ごとに学校単位で作成したウェブサイトによる参加となります。

今年度のコンテストには全部門あわせて34校の参加がありました。参加校の国別内訳は、オーストラリア20、アメリカ4、カナダ3、ニュージーランド3、日本3、インドネシア1、で昨年に比べて参加校は二倍半ほどに増え、よりにぎやかなコンテストとなりました。参加作品はコンテストのウェブサイトに行き、2009 Contest Galleries をクリックすると見ることができます。世界各地の小中高校が工夫を凝らして作ったウェブサイトの数々をお楽しみください。<http://www.japanesewebpagecontest.com/>

この原稿を書いている時点(09年6月上旬)ではまだわからないのですが、できれば来年度も引き続き講座とコンテストの両方を実施していきたいと考えています。実施することになった際には、ウェブサイトの日本語プログラムへの利用にご関心のある方はどうかふるってご参加ください。

## 国際交流基金トロント情報

## カナダの日本語教育における「さくらネットワーク」の可能性

藤居 真美(国際交流基金・トロント日本文化センター副所長)

トロントに赴任してきてからこの6月末でちょうど1年を迎えますが、昨年のカナダ日本語教育振興会(CAJLE)年次大会に参加させていただいた機会をはじめとし、これまでいろいろな場所で、カナダの日本語教育に取り組みられている先生方の明るさと熱意に感銘を受けてまいりました。

世界の日本語教育機関、教師、学習者を支援し、日本語教育を普及していくことを大きな活動目的の柱の一つとしている国際交流基金として、カナダで今何が必要とされているのか、国際交流基金が取り組むべきことは何なのかを考える際に、現場の先生方の声を聞かせていただくことは大変重要だと考えています。この1年間、先生方からお話を伺う中で認識を強めたのは、先生方が課題を共有し解決策を一緒に話し合える交流の場をつくること、そのネットワークを活発化していくことの重要性です。

カナダは国土が広く、他の先生方との交流を持つ機会はなかなか持てないという地理的制約はもちろんあります。当センターとしても、先生方が先生同士で問題点や悩みを共有し、解決策を話し合えるような場や関係をつくる取り組みを支援していくのと同時に、当センター所在地がトロントであるという地理的制約を越えて、地理的に離れた地域の先生方のニーズを把握し、可能な支援を検討し実施していける体制・仕組みづくりが必要だと考えています。

そこで今回はこの場をお借りし、国際交流基金が世界で取り組みをはじめたネットワーク構築について皆様にご紹介するとともに、この取り組みを上で述べた目的のためにカナダで活用していただけるよう、皆様のご理解とご協力をお願いしたいと思います。

国際交流基金は、海外における日本語教育充実のために、関係機関の皆様との連携が重要であると考え、海外の日本語教育機関をつなぐネットワーク「JF にほんごネットワーク」(通称「さくらネットワーク」)をつくりました。国際交流基金はさまざまな日本語教育プログラムを通じて、カナダ

各地の多くの機関との間に絆を培ってきましたが、こうした基金と協力関係にある機関・団体に同ネットワークの「メンバー」となっていたくことで、このつながりを再確認し、その関係を強化するとともに、日本語を学ぶ人々が増え、日本語教育の環境の向上がますます求められている現在、ともに連携・協力し、日本語教育を推進していきたいと考えています。

また、このネットワークへの参加を呼びかけていく形で、これまで支援の届かなかった裾野への支援を展開する努力を行っていきたくと考えています。

国際交流基金は、高等教育機関、初中等教育機関、民間の日本語学校など、さまざまな日本語教育機関に支援を行っているため、このネットワークを活用していくことで、日本語教育の場に、機関や教育段階の枠組みを超えた、一層のつながりや広がりを生み出していける可能性もあると思っております。同ネットワークを、いかにカナダの日本語教育全体の振興に役立てることができるかどうか、先生方からの忌憚のないご意見やご提案をいただければ大変ありがたく存じます。

先生方の熱心な日々の取り組み・活動の陰には、いろいろな悩みや課題があるものと思います。国際交流基金ができることには予算と枠組みの制限の中で残念ながら限りがあるのも事実ですが、まずはカナダの日本語教育の現場で、今何が必要とされているのかを先生方から教えていただくことで、国際交流基金がカナダの日本語教育機関、先生方、学習者のために何ができるのかを考え、実現していけたらと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

## B.C.州日本語教師夏季セミナー2009

日本語 B.C.(B.C.日本語教師会)並びにジャパン・ファウンデーション・トロントの主催によるB.C.州日本語教師夏季セミナーが行われます。この三日間のセミナーは教授法のワークショップの他に参加者のプロジェクトワークやネットワークなども企画されています。皆様奮ってご参加ください。尚セッションは日本語で行われます。

日時: 8月25日(火)~27日(木) 午前9:00~午後3:15

場所: 日系プレイス National Nikkei Heritage Centre

6688 Southoaks Crescent, Burnaby B.C.

<http://www.nikkeiplace.org/>

## 申し込み:

7月11日までの申し込み \$115(\*カナダドル)

その後7月12日から8月11日まで \$150

(3日間のセミナー代と8月27日の昼食が含まれます。)

\* 8月11日以降キャンセルする場合は返金なし

\* アメリカの先生方も申し込み・費用は上記に準じます。

但し費用はセミナー当日現金(カナダドル)でお支払いください。

## ワークショップの内容:

- ・ 技能別の教え方「話す」「聞く」「読む」「書く」から、

1~2つ

- ・ トピックベースの日本語運用力の授業
- ・ 教材の紹介と使い方
- ・ 現代の日本事情とポップカルチャー
- ・ DVD リソース「エリンが挑戦! にほんごできます。」の効果的な使い方
- ・ プロジェクトワークの発表

## 特別講師: 根津 誠 先生

国際交流基金日本語国際センター専任講師。昨年まで国際交流基金クアラルンプール日本文化センター主任講師をされていました。根津先生のウェブサイトをご覧ください。

<http://netsuma.txt-nifty.com/>

\* 25、26日は、昼食を持参なさるか、近くの店やレストランをご利用ください。

\* 内容詳細については変更の可能性もありますので、ご承知おきください。

その他、質問などのお問い合わせはレノビッチ祥子(sachiko\_r@shaw.ca)までお願いします。

## 編集者巻末言

## 背表紙

室屋春光(ニュースレター編集担当)

齢五十を越え自宅の本棚に並んでいる書物の背表紙に目を向けるたびに、読書ができないようになるまでこれらの本を何度か繰り返し読むのだなという奇妙な思いにかられる。簡単に読みたい書物を手に入れられる日本に住んでいれば、そのような思いとは無縁だろう。

大学へ通っていたころは、国鉄(JR ではありません)の

駅から大学まで大通りを二十分ほど歩いた。通りの両側には古本屋が三十軒ほど点々とならんでいる。学校の帰りには飽きもせず毎日のように一軒一軒のぞいて欲しい本の値段を確認し、この本はあの店で、あの本はこの店で、と見当をつける。懐があたたまるとお目当ての本を買い、さらに余裕があれば飲み屋へというのがお決まりのコース。だが、優先順位が逆になることもしばしばだ

った。というわけで、そのころの古本屋の棚に並んでいた書物の背表紙はいまでもよくおぼえている。

人と話をしている海外生活が長いという話題になると、どんなものに不自由しますかと聞かれることがある。私の場合はあまり食い意地は張っていないので、書物に不自由するのがいちばんつらい。海外でも大きな都市には日本の新刊書を専門に扱う書店があることがあるが、ややもすれば日本の二倍から三倍の出費を強いられるし、自分の読みたい本があるとも限らない。

在留邦人の多いところには日本書専門の古本屋があることがあって、これが私にとっては本当にありがたい。メルボルンに住んでいたときには、通勤電車のターミナルになっているフリンドーズ駅から道を隔てた向かい側の雑居ビルに小さな古本屋があり、時々勤め帰りに立寄ってまとめ買いをした。残念ながらエドモントンにはそういう店はないのだが、バンクーバーのダウンタウンには日本の古本屋チェーンが大きな支店を構えていて、仕事でバンクーバーに出かける機会があるたびに必ず訪

れる。スーツケースの中にどのぐらい余裕があるかを勘案しながら棚から棚へと移動し、小一時間もすると選んだ本が3、40センチほどの高さになっている。

専門の古本屋でなくても、日本食の食材を扱っている店が奥のほうに古本コーナーを設けていることもよくある。こういうところにある本は私の趣味とは合わないものがほとんどだが、丹念に目を通すと中には読みたいと思うものもある。

そういう古本屋で昔よく見た書物の背表紙と出会うことがある。ここにもはるばる日本から越してきた人がいて、家財道具一式とともに書物もまとめてこの地へ送り、またどこかへ越していくときに処分したのだろうと思う。そういう本の背表紙を見ると、どうしても読みたいわけではないのだがついつい買ってしまい、酒などちびちびやりながらページを繰ってしまう。

このようにして海外の古本屋で買い集めた本が背の高い本棚で二つ分ほどの分量になった。奇妙な思いが生ずる所以である。

## 編集後記

今号も読み応えのある記事がたくさん集まりました。執筆者の方々には夏休み中のところから日本からカナダからアメリカから記事を寄せていただき、どうもありがとございました。さて、今年の年次大会のテーマは「教師間・教育機関の連携を目指して」です。ニュースレターもさまざまな情報の提供を通じて、皆様の連携の一助になればと願います。それでは、8月に緑深いトロントにてお会いするのを楽しみにしております。(ぜひとも今すぐホームページにてお申し込みください!)安袁岐@金具洲頓 今号もまた沢山の方々に寄稿していただきました。夏休みで日本に滞在している方。面識もない見知らぬ者(私)からの投稿依頼に快く応対してくださった執筆者。学生を引率しての訪日で超多忙でありながらも間に合わせてくださった方。病気の体に鞭打って仕上げてくださいました理事の方。どの稿にも、どの執筆者にも感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。表紙レイアウトが新しくなったことにお気づ

きでしょうか。8月の年次大会“都倫都”でお待ちしています。この夏も安全に楽しくお過ごしくださいませ。素妓素@都倫都 私事になるが、6月中旬で3年間にわたる日本語アドバイザーの任期を満了し、江戸門頓の地を離れることになった。とはいうものの、インターネットへのアクセスがあればどこにいてもこのニュースレターの編集の仕事はできるので、カナダにいないというのは変酋長を辞する理由にはならない。それに、せっかくお知り合いになることができた CAJLE のみなさんとの縁がなくなるのもさびしいので、しばらくの間は変酋長としてご愛顧ねがえればと思っている。無露野@江戸門頓

投稿のお願い: CAJLE ニュースレター編集部では CAJLE 会員の皆様からの投稿を歓迎します。小論、エッセイ、ご意見、耳寄り情報など、お気軽に編集部までお寄せください。 smuroya@gmail.com